

I 糖業の概況

1 海外の動向

(1) 砂糖類概況

F. オリヒト社が平成 18 年 7 月に発表した世界の砂糖需給によると、05/06 年度（9 月～8 月）の世界の砂糖の生産量については、前年産を 4.9% 上回る 1 億 4900 万トンとなる見込みである。これは EU で生産割当数量が削減されたにもかかわらず、前年と同レベルの生産量が見込まれる上、南米やアジアでの増産、特にブラジルとインドが大幅に生産を増加させているためである。

一方消費量については、前年度より 0.7% 上回る 1 億 4500 万トンが見込まれている。これは最近のトレンドの年間 2% 程度の増加に比べ、少ない増加幅である。要因として考えられるのは、砂糖の高価格による消費の伸びの減少や、代替甘味料の使用の増加等である。

その結果世界の期末在庫については前年度と同水準の 6,015 万トン程度の在庫量となる見込みである。

(2) 砂糖の国際価格の推移

2005 年 4 月～2006 年 3 月のニューヨーク現物相場の月平均価格をみると、大幅な価格上昇で推移した。4～5 月には需給の見通しについてはっきりとしなかったことから停滞傾向で推移していたが、6～7 月には実需買いが入り始めると同時に、生産量についての懸念が出始め、価格は上昇傾向となった。8 月末にはハリケーンカトリーナの上陸による米国の需給逼迫、それ以降も原油高騰に伴うエタノール需要の増加、投機筋による株式市場から商品取引市場への資金の移転等があり、相場は活況を呈した。この結果、今年 6 月以降一本調子で相場は上昇し、12 月には 15 セント、1 月には 17 セントを突破し、2 月には 18.93 セントと記録的な高値を更新した。

2 国内の動向

(1) 砂糖類概況

平成 17 年産の甘味資源作物の国内生産は、てん菜については、作付面積はやや減少したが、全体的に生育に適した天候に恵まれたことから単収が高く、総収量は昨年に次ぐ 420 万 1 千トンとなり、産糖量も史上最高であった昨年に次ぐ 70 万 8 千トンとなった。

一方、さとうきびは、収穫面積が昨年より減少したことに加え、台風や干ばつなどの被害を受けたが、昨年を上回る 121 万 3 千トン、産糖量 13 万 8 千トンとなった。

砂糖の消費は、消費者の低甘味嗜好や砂糖に対する誤解、加糖調製品の輸入増加などを背景として減少が続いているが、砂糖需要の維持・増大に向けたシンポジウムの開催や各種広報媒体を活用した普及啓発活動のための取り組みによって、平成 14 砂糖年度においては、229 万 6 千トンと、12 年振りに前年を 0.8% 上回ったものの、平成 15 砂糖年度は対前年 2.6% 減の 223 万 7 千トン、平成 16 砂糖年度は対前年 0.4% 減の 222 万 9 千トン、平成 17 砂糖年度は対前年 1.9% 減の 218 万 7 千トン（見込み）と減少傾向が続いている。

加糖調製品の輸入状況（17 年 4 月～18 年 3 月）は、「コーヒー調製品」が対前年 26.1%、「粉乳調製品」が同 5.5% 減少したものの、「ココア調製品」が同 6.4%、「調製した豆」同 7.5%、「ソルビトール調製品」同 5.9%、「その他の調製品（ソルビト

ール調製品を含まない) 同 15.1%増加した。この結果、これらの品目全体では、対前年 4.2%増の 43 万 1 千トンとなった。

異性化糖の移出動向は、第 1・四半期の移出数量(標準異性化糖換算)は、4 月、5 月、6 月ともに前年同期を上回り、4.6%上回った。第 2・四半期は、7 月・8 月が前年を下回り、前年同期を 3.1%下回った。第 3・四半期は、10 月、11 月が前年を上回り、前年同期を 3.7%上回った。第 4・四半期は、1 月・3 月が前年を上回ったものの、前年同期を 0.2%下回った。この結果、17 年度の移出数量は、前年より 1.2%増の 80 万トンとなった。

(2) 砂糖類の国内価格の推移

砂糖の日経相場(東京)上白大袋の価格は、17 年 5 月 17 日に 135~136 円/kg となって依頼、5 か月ほど同水準で推移していたが、原油高により燃料コストや資材等の上昇を背景とする国際粗糖価格高騰を反映し、10 月 11 日に 6 円高の 141~142 円/kg、平成 18 年 1 月 20 日に 5 円高の 146~147 円/kg、3 月 30 日に 10 円高の 156~157 円/kg となった。

異性化糖の日経相場大口需要家向け(東京・タンクローリーもの)価格は、原料とうもろこしの国際価格の上昇や海上運賃の高騰によるコスト上昇を背景とする異性化糖企業各社のユーザーへの値上げ要請の浸透により上昇傾向にあり、5 月 7 日付けの日経相場でキログラム当たり 5 円値上がりし 91~96 円/kg(果糖分 55%もの、中心値)となって以来、同水準で推移していたが、さらに国際粗糖相場等の高まりも影響し、3 円値上がりし 1 月 27 日の日経相場で 94~99 円/kg(果糖分 55%もの、中心値)となった。

(3) 生産地の動き

「食料・農業・農村基本計画」(平成 17 年 3 月)の方針に基づき、以下のような課題の解決のための取り組みが実施された。

[てん菜]

- ① 高性能機械化体系の確立、直播栽培技術の改善などにより、生産コストを 1 割程度削減、
- ② 需要動向に応じた作付指標の作成とこれに基づく計画的生産を推進。

[さとうきび]

- ① 担い手の生産規模の拡大、機械化一貫体系の確立などにより、労働時間を 2 割程度削減、
- ② 優良品種の育成・普及、収穫作業の平準化による適期植付、早期株出管理の実施などを通じた単収の向上・安定化により、生産コストを 2 割程度削減。

(4) 業界の動き

国産糖企業は、製造・流通コストの縮減を図るため、原料受入れ体制の合理化、効率的な製造・流通施設などの整備などが実施された。

精製糖企業は、砂糖の価格競争力の強化を図るため、生産コスト低減に向けて、系列を超えた企業の合併や製糖の共同・委託生産化が実施された。

砂糖の消費拡大を図るため、砂糖消費拡大推進事業として(社)糖業協会、精糖工業会、砂糖を科学する会の主催により、小中高校生等を対象とした「暮らしの中のお砂糖」作品コンクールを実施するとともに、主要都市においてシンポジウムが実施された。また、消費者への直接的情報発信窓口である医師や栄養士などの専門家に対し

て砂糖の正しい情報を提供し、砂糖に対する誤解を払拭することを目的とした「砂糖科学会議」やパンフレット等を配布するなど、昨年に引き続き積極的に実施された。

また、砂糖の生産・流通に携る8団体が自主的に構成する「お砂糖“真”時代」推進協議会の活動は15年目を迎え、今年もっとも話題になったお砂糖を使ったデザートを選定・発表が実施された。

(5) 農林水産省の動き

新たな食料・農業・農村基本計画の見直しの一環として、担い手の経営全体に着目した経営安定対策（品目横断的政策）が19年産より導入される方向が示され、新たな経営安定対策への転換に伴う甘味資源作物やでん粉原料用いも生産の支援のあり方など、今後の砂糖及びでん粉に関する制度・施策について幅広い検討を行うため開催されていた「砂糖及びでん粉に関する検討会」において、17年3月31日に今後の砂糖及びでん粉政策の見直しの基本方向がとりまとめられた。

このことを踏まえ、その後も検討が進められ、17年11月、12月には「大綱」という形で、生産者への支援水準の試算が提示されるとともに、支援対象者の用件が決定された。18年2月には、新制度の骨格である糖価調整法等の改正が経営安定新法、主要食糧法の改正とともに、いわゆる農政改革三法として国会に提出され、衆参両議院での審議を経て成立し、6月21日に公布された。

3 国内産糖の生産動向

(1) てん菜糖

ア てん菜の生産

平成17年産てん菜の作付面積は前年産比486ha減の67,501ha、栽培農家戸数は前年産比221戸減の10,120戸、一戸当たりの作付面積は前年産比0.1ha増の6.67haとなった。

北海道平均のha当たりの収量は62.2トン（前年産68.5トン）、総収量も4,201千トン（前年産4,656千トン）と史上第2位の数値となった。また、根中糖分は17.1%（前年産17.2%）とほぼ平年並の糖分となった。

イ てん菜の生育概況

てん菜の植付け開始は、天候の影響により、平年より4日遅く、最盛期も平年より4日遅かった。また、各地で作業が長引いた。

生育初期においては、5月の低温により定植後の苗の活着は遅れ、生育は停滞気味となり不良であったが、6月には気温が高めに推移するなど好天に恵まれ、非常に良好な生育となり、7月には平年並にまで回復した。

生育中期以降は、8月には暑い日が続いたが、適度な降雨があり、更に秋も高温に経過したことにより、根部の肥大は特に順調に推移し、根中糖分については、高い気温の影響により平年並となった。

病害虫については、褐斑病の多発が懸念され、秋にやや発生が目立つ圃場も見られたが、全道的にはほぼ平年並の発生量に終わった。また、根腐病はやや少なく、そう根病は平年並で、葉腐病、黒根病の発生も一部では見られた。ヨトウガの発生は少なかった。適期防除の徹底等により、全道的には病害虫による被害は少なかった。

ウ てん菜糖の生産

17年産の産糖量は、産糖歩留が16.86%（前年産16.87%）とほぼ前年並で、ha当たりの収量が前年に次ぐ高収量となったため708,488トン（前年産785,510トン）となった。このうち、てん菜原料糖は256,389トン（前年産308,911トン）で総産糖量に対する割合は36.2%（前年産39.3%）となった。

(2) 甘しゅ糖～鹿児島県産～

ア さとうきびの生産

17年産のさとうきびの収穫面積は、前年実績より798ha(8.4%)減少して8,749haとなった。

作型別割合では、夏植え23.7%（前年産22.5%）、春植え20.2%（同21.7%）、株出56.1%（同55.9%）となっている。

10a当たりの収量は、前年実績より791kg(14.9%)増加して6,099kgとなった。地域別では、種子島地域が1,486kg(22.7%)増加して8,032kg、奄美地域が681kg(15.8%)増加し4,989kgとなった。そのため、さとうきびの生産量は前年より26,821トン(5.3%)増加して、533,594トンの実績となった。

また、さとうきびの栽培農家戸数は、前年より379戸(3.5%)減少して10,408戸となった。

イ さとうきびの生育概況

○生育初期（3月～5月）

春先の低温により生育はやや遅れた。

○生育旺盛期（6月～9月）

沖永良部島と与論島では長期にわたる干ばつの影響によって、大きな被害を受けたが、台風の直撃がなかったことから生長が促進し、種子島では史上2番目の高単収となり、地域による格差が大きかった。

○生育後期（10月～収穫期）

12月中旬の急激な低温と強風、雨天の影響により登熟が停滞し、その後も回復しなかったため、平均糖度は前年に比べ上昇したが、平年を大きく下回った。

ウ 甘しゅ糖の生産

分みつ糖の歩留は前年実績より0.74ポイント上回り11.81%、含みつ糖の歩留は前年実績より0.62ポイント上回り12.65%であった。

産糖量は、分みつ糖が前年実績より6,607トン(11.9%)増加して62,053トン、含みつ糖も前年実績より300トン(41.5%)増加して1,023トンとなった。

(3) 甘しゅ糖～沖縄県産～

ア さとうきびの生産

17年産のさとうきびの収穫面積は、前年実績より1,126ha(8.3%)減少して12,485haとなった。地域別では、沖縄地域が735ha、八重山地域が269ha、宮古地域では120ha、前年実績より減少した。

作型別割合では、夏植え48.5%（前年産45.0%）、春植え11.9%（同12.9%）、株出39.6%（同42.2%）となっている。

10a当たりの収量は、前年実績より454kg(9.1%)増加して5,442kgとなった。地域別では、沖縄地域が59kg(1.0%)減少し4,729kgとなったが、宮古地域が1,434kg(27.8%)増加し6,592kg、八重山地域も88kg(1.6%)増加し5,466kgとなった。そのため、さとうきびの生産量は前年より452トン(0.1%)増加して、679,419

トンの実績となった。

また、さとうきびの栽培農家戸数は、前年より 464 戸（2.6%）減少して 17,646 戸となった。

イ さとうきびの生育概況

○生育初期（3月～5月）

各地域の月平均気温は、3月はかなり低く、4月は概ね平年並み、5月は高めで推移した。降水量はほぼ全域で概ね平年並みだった。

○生育旺盛期（6月～9月）

各地域の月平均気温は、やや高めで推移した。降水量は、9月は宮古で多かったが、それ以外の地域は少なめに推移した。7月、8月は、宮古、八重山地域でほぼ平年並みであったが、本島地域、本島周辺離島、大東地方等では記録的な小雨であった。また、期間中に6個の台風が接近し、そのうち台風9号等4つの台風は、倒伏、根離れ、葉の損傷など大きな被害を与えた。

○生育後期（10月～収穫期）

12月中旬から1月上旬にかけて気温の低い状態が続いた。12月中旬の旬平均気温は平年に比べてかなり低くなったが、1月中旬以降は、気温の高い日が多くなった。今期は、特に八重山地域への台風の襲来が多く、茎の折損、葉の裂傷等により収穫面積減少に大きく影響した。

ウ 甘しゃ糖の生産

分みつ糖の歩留は前年実績より 0.9 ポイント上回り 12.13%、含みつ糖の歩留は前年実績より 0.33 ポイント上回り 13.89%であった。

産糖量は、分みつ糖が前年実績より 4,876 トン（6.9%）増加して 75,923 トン、含みつ糖は前年実績より 1,197 トン（19.2%）減少して 7,426 トンとなった。